

『雨月物語』にみる文学のなかの異界と  
その都市・建築空間  
～江戸期の文学空間の一考察～

正会員 ○ 榊原 守男\*1  
同 近藤 正一\*2  
同 早瀬 幸彦\*3  
同 若山 滋\*4

【序論】文学という虚構の中の都市・建築を扱う以上、その「虚構」を徹底的に、異次元のレベルにまで追求した文学、怪異譚を題材とするのも、一つの方法である。「日本史上最高の怪談小説集」という評価を受ける怪異譚集、『雨月物語』を本研究では取り上げ、そこに現れる輻輳したもうひとつの虚構の世界、つまり「異界」の都市・建築を分析し、以て、江戸期という爛熟文化における空間意識の解明の一助とすることが、当該研究の目的である。

【研究対象・方法】『雨月物語』全九篇を研究対象とし、以下の考察を行う。1) 各篇に出現する建築・都市に関する用語を建築用語として抽出し、建物、部屋、部位、部材・建具、家具・用具、庭、派生語、国、都市、村、都市施設、その他に分類して、それらの頻度について各篇を比較考察する。2) 各篇の舞台となる空間の文章量(文字数)を作者・読者の意識時間として集計し、さらに、怪異との同居、幻の舞台・夢、回想・考証、日常・現実、及びそれら組み合わせを含めた11項目に分類して、舞台の構成を考察する。3) 文脈に拠って、建築用語に付帯する空間評価について考察する。

【建築用語の頻度】各篇の用語の構成比を図-1に、同様に頻度の高い用語を表-1に示す。各篇は建築用語の構成から、四つのタイプに分かれる。①特定の[国][村]に限定をせず、それが話のスケールの大きさにつながる型、②同じ[国][村]の用語の頻度が高く、現実感の高い型、③「家」「京都」「住む」の頻度が高く、小コミュニティの中の人間模様を描くもので、構成比のバランスがとれている型、④その他、がそれぞれの特徴で、①に「白峯」「貧福論」、②に「菊花の約」「佛法僧」「青頭巾」、③に「浅茅が宿」「吉備津の釜」「蛇性の姪」、④に「夢應の鯉魚」が分類される。全体としては[国][派生語]の頻度が高く、上田秋成の学殖の深さをうかがわせるが、[建物]の頻度も何故か高い。

表-1. 『雨月物語』各篇における頻度の高い建築用語

「白峯」			「菊花の約」			「浅茅が宿」		
建築用語	要素分類	頻度	建築用語	要素分類	頻度	建築用語	要素分類	頻度
大衆経	その他		左門	派生語	32	家	派生語	
筆の跡	その他		出雲の國	国		宿	建物	
経	その他	7	雲州	国		人居	建物	21
天が下	国		出雲	国		都	都市	
天下	国	5	此國	国		京	都市	20
辰且	国		八雲たつ國	国	7	住	派生語	13
漢土	国		城	建物				
他國	国	5	大城	建物	6			

「夢應の鯉魚」			「佛法僧」			「吉備津の釜」		
建築用語	要素分類	頻度	建築用語	要素分類	頻度	建築用語	要素分類	頻度
江	国		高野山	国		家	建物	
湖	国		此山	国		宿	建物	
湖	国	6	秘密の山	国		家	派生語	
三井寺	建物	6	高野	国		家	派生語	
寺	建物	5	山	国	17	家	派生語	
繪	その他	5	佛法僧	庭		住	派生語	20
			鳥	庭	10	住	派生語	6
			毒	庭	5	戸	部位	
						戸	部材・建具	5

「蛇性の姪」			「青頭巾」			「貧福論」		
建築用語	要素分類	頻度	建築用語	要素分類	頻度	建築用語	要素分類	頻度
住み	建物		富田といふ里	村		財	派生語	
家	建物		此里	村		黄金	その他	
住居	建物		里	村	11	その他	その他	14
住家	建物		羅若	建物		家	派生語	
宿	建物		院	建物		宿	建物	
家	派生語	31	寺	建物	11	戸	建物	
住む	派生語		山	国	8	家	建物	11
住	派生語	13				國	国	5
都	都市	12						

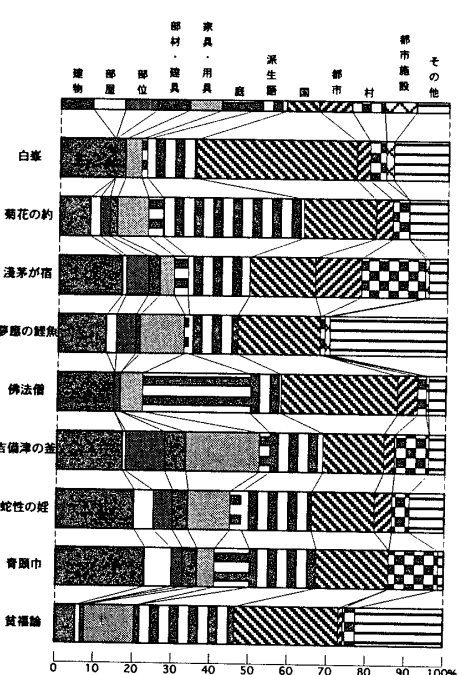


図-1. 各作品の建築用語の割合

【舞台構成】舞台推移図の一例を図-2に、同様に舞台の性質別の推移図を図-3に、舞台構成図の基本概念図を図-4に、その一例を図-5に示す。舞台構成図に拠って、各篇は4タイプに分類が可能であるが、頻度におけるそれとは、必ずしも一致しない。①図の中央に最大の意識時間がある型（「白峯」「貧福論」）、②図の上半分（現実・俗界の範囲）に意識時間が偏重する型（「菊花の約」「佛法僧」「青頭巾」「吉備津の釜」）、③俗界と異界の二極に意識時間が分散する型（「夢應の鯉魚」「浅茅が宿」）、④意識時間が全体に拡散する型（「蛇性の姪」）、となる。全体として、俗界の建物の延長線上に異界があるか、異界が俗界の鏡写しとなっており、両界を繋ぐのは「建物」に関連する舞台である点が一貫する。

【文脈内容】用語の頻度や舞台構成による分析を、補強するような結果を示している。建物を通じて異界に入り込んでゆく点は、「家」が、愚かさ・不気味・哀しみ・破壊といった、異界に魅入れやすい情感に繋がること等で証明され、「京都」は一貫して、安心、喜び、憧れといった情感を示し、舞台としての、[日常・現実]ないし、それと[回想・考証]との重なりにある「京都」と矛盾せず、さらに、「天下」「国家」は戦乱の歴史や学問に繋がり、作者上田秋成の学識の深さをも見せている。一方、庶民の生活空間に近い「家」「傘」「壁」「戸」等が、武士・貴族のそれに当たる「城」「太刀」「屏風」「障子」等に較べ、より直接的に異界に向かう文脈内容を見せるのは、庶民文化である江戸期の文学空間の特徴と考え得る。

【結論】『雨月物語』の中の空間は、俗界-異界、人間の意識-行動という次元において構造化され、幾つかの空間が複合された舞台において物語が進行する。それを念頭において各篇を分析してみると、この物語が著され、刊行された江戸時代中期において「異界」とは、現実の鏡写しという面もあるが、むしろ「建物」を通じて現実と繋がっている世界である、という空間意識が九篇中の大勢を占めるという結論に達する。更に言えば、現実から異界への空間の橋渡しをしているのは、武士や貴族ではなく、庶民の生活空間に近い建築要素であるという一面もあるようだが、にわかには首肯しがたい。

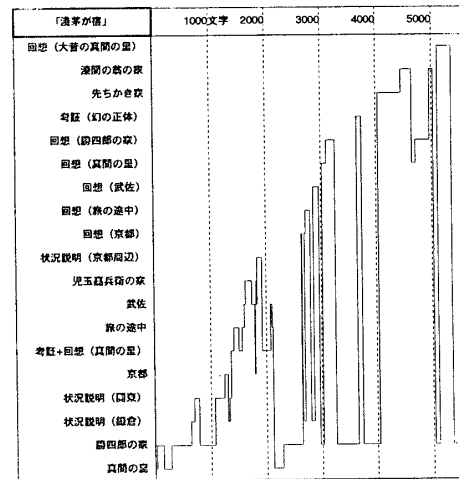


図-2.「浅茅が宿」における舞台推移図

「浅茅が宿」	1000文字	2000	3000	4000	5000	総計 (文字)
怪異との同居						888
幻の舞台・夢						1040
回想・考証						1967
日常・現実						4521
場面	1	2	3	4	5	5561

図-3.「浅茅が宿」における舞台推移の性質別分類

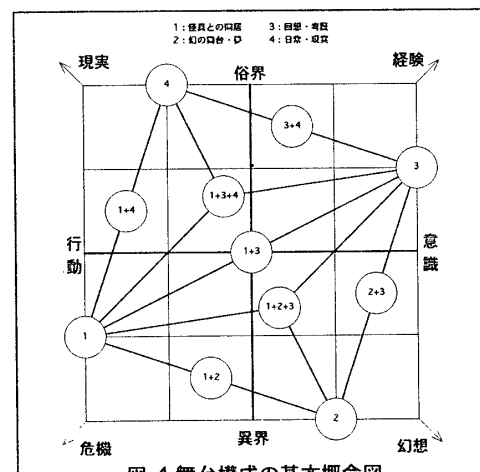


図-4.舞台構成の基本概念図

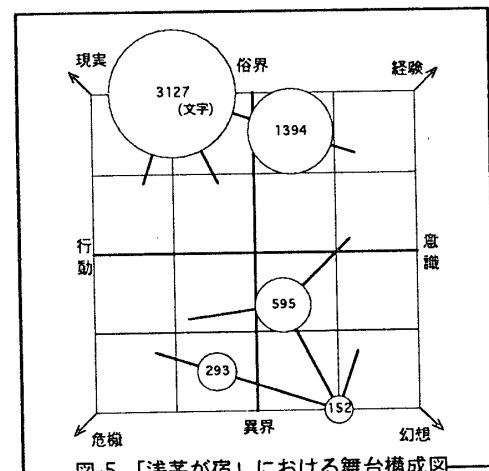


図-5.「浅茅が宿」における舞台構成図

※1 名古屋工業大学大学院博士前期課程  
 ※2 名古屋工業大学助手・修士(工学)  
 ※3 名古屋工業大学大学院博士後期課程・修士(工学)  
 ※4 名古屋工業大学教授・工学博士

※1 Master's course, Nagoya Institute of Technology  
 ※2 Asst., Nagoya Institute of Technology, Master Eng.  
 ※3 Dr.'s course, Nagoya Institute of Technology, Master Eng.  
 ※4 Prof., Nagoya Institute of Technology, Dr. Eng.